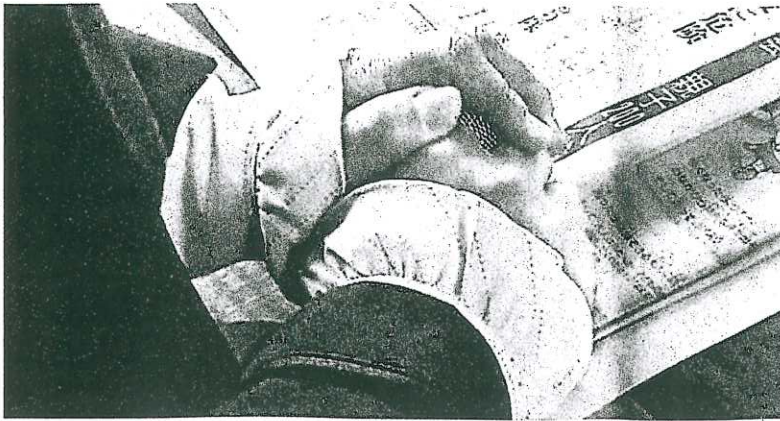


我が子たたく手包んで

「私、虐待」打ち明けた

「誰もが一線越す」NPO結成

子どもへの虐待が止まらない。なぜ、わが子を傷つけてしまうのか。母親も苦しんでいた。立ち直るきっかけになったのは、追い込まれた自分を受け止めてくれる人の存在だった。



「ずっと苦しかった。だれかに聞いて欲しかった」。主婦はそう語った。大阪府内、高木智子

抜いた。30歳台までやせ細り、生理も止まった。

まずは長女に向かった。ちよつとしたことで足や尻をたたいた。「お母ちゃんに鬼になった」。長女はそう言っておねしょや夜泣きを繰り返すように。慣れない土地で相談相手はいない。夫に「会社という逃げ場があつてええなあ」と食つてかかった。

その年の7月下旬、マンション8階のベランダから外を眺めた。富士山がきれいだった。「飛び降りたら楽になる」。両脇に2人の子を抱えたが、それ以上力が入らない。「なんて母親なんや」。その場に泣き崩れた。

子どもを連れて行った病院で、看護師に「私、虐待しています」と打ち明けた。「一

人で頑張りなくてもいいと言つてもらえて、気持ちが楽になった」。週2回家事代行を頼み、夫も進んで家事・育児をこなすように。次女の症状も改善して余裕を取り戻す中で、長女をたたくことはなくなった。

「困難な状況が積み重なると、誰もが一線を越えるおそれがある。サポートしたい」。01年に大阪に戻り、通信教育で社会福祉士の資格を取つて「ふらつとスペース金剛」を立ち上げた。

「水の怖さをわからせるために浴槽に沈めた」「たばこは危険だと教えるために火を押しつけた」。そう話す母親らに、岡本さんらは「私もそんな時期、あつたけどな」と体験を語り合う。

相次ぐ虐待事件。「疑わしければ通報を」という呼びかけに、親がますます息苦しくなつていないか気がかりだ。(机美鈴)

長男が自分をにらんだ

「今なら間に合う」電話

「午後3時までなら、夫に知られない」。いつしか、そんな計算をするようになっていた。たいてい子どもにあざ

ができて、水で冷やせば、夫の帰宅する夕方までに「散らす」ことができるタイムリミットだった。

関西に住む主婦(47)は3年前まで、中学3年の長男(14)と中1の次男(12)をたたき続けた。自身、両親からたたかれて育った。「しつけのために当たり前前」と思っていた。結婚して10年近く子に恵ま

れず、妹たちに先を越された。子育てにあこがれた。だが、育児書の説明通りにはならなかった。

初めて手を上げたのは、長男がコップを握るようになったころ。テーブルに落とし、お茶をこぼした。次男にも、歩き始めたころから手が出た。

「ママも手が痛いんだから。怒らせる方が悪いのよ」。近所に聞こえないよう、扉も窓とカーテンを閉め切った。

3年前、小6になった長男をたたくと、手をグーに握りしめて、にらんできた。「向かつてくる」。将来、自分のように手を上げる親になる姿を想像した。「今なら間に合うかもしれない」

虐待防止や親のケアに取り組み講座「MY T.R.E.E.プログラム」を新聞で見つけた。主催する兵庫県西宮市の団体にすぐるよう電話をかけた。

週1回、同じ課題を持つ母親10人が匿名で語り合った。ため込んだ思いを一気に引き出した。「いい子に育つて欲しいと必死すぎたのね」。そう励まされた。4カ月間参加した。その後、手を上げたことは一度もない。「料理するのも手。抱きしめるのも手。手は、たたくためにあるんじゃないと分かったから」(高木智子)